

# 魔法先生ネギま！ 世 界を繋ぐ少女達の詩

クルックン

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

ネギま！とアルトネリコの若干？クロス物です

ヒュムノス語は使えないでの期待しないでください

詩は題名だけ載せます、聴きながら歌詞を見ながらでも  
下手くそです！

目

1 時間目

2 時間目

次

8 1



# 1時間目

ヒソヒソ ヒソヒソ

何か言っている

「可哀想に、まだ小学生でしょ？」

ヒソヒソ ヒソヒソ

どうだつていい・・・だつて

「此れからどうする？うちでは引き取れんぞ」

ヒソヒソ ヒソヒソ

かねー」

「うちだつて受験生が居るんだから無理よ・・・やつぱり施設

お父さんもお母さんも死んじやつたんだもの

「お・・す・」

・・・

「おい、・す・」

・・?

「おい、聞いているのか小娘！」

「・・・だれ？」

「私か？あー、そのだな、昔お前の両親に世話になつた事が有る者だ」

「お…とう…さんた…ちに？」

話しかけてきたのは、綺麗な金色の長い髪に、日本人離れした体つきの背の高い女性だつた

「そうだ、それで…だ、家に来る気は無いか？」

「え？」

何を言つているんだろうこの人は、私が黙つていると周りの大人が

「ちよ、ちよつとあなた！行き成り出てきて何言つてるのよ！」

「そうだ、誰とも知らない奴に任せられるわけ「黙れ!!」う…」

「さつきから貴様らは何を言つている、先程まで自分たちは小娘を迎える事は嫌だと  
言つていたのを忘れたのか」

「ぐ…だが」

「はあ、なら此れを見れば納得するか？」

そう言うと女性は封筒を取り出し男性に投げた

「ん？…これか？」

「その書面の通り何かあつた時は頼むと、こいつの両親に頼まれているんだ」

「む、むう」

お父さんとお母さんに?

「さて、小娘「瑠華」ん?」

「名前……瑠華」

「瑠華……か」

「ん……詩之宮・F・瑠華《うたのみや・フイラメント・るか》」

「……ほう、フイラメントか」

「?」

「いや、それでどうする、来るか?」

「行く、お父さんとお母さんがお願ひしたなら」

「そうか、では行こうか」

そういうと女性は手を差し出してきたので、それを掴み立ち上がる

「……あつたかい」

「ん? 何か言つたか」

「何でも無い」

女性が歩きだしたので、置いていかれないよう付いていく

そう言えばこの人の名前つてなんだろう?

「なまえ、教えて」

「ん？ああ、そう言えば教えてなかつたな、私の名前は——」

「ん・・・夢、か」

2年前、私の両親は死んだ、死因は飛行機事故だつて公式ではなつてゐるけれど、ホントのところはわからない

お父さんが仕事で海外へ行くのにお母さんが付いて行つて、そのまま二人とも帰らぬ人となつてしまつた

「ケケケ、今日モ可愛イ顔シテルジャネーカ、切り刻ンデイイカ？」

「おはようチャチャゼロ、切り刻んじやだーめ  
ベットから起きて一階に下りると、我が家の切り裂きジャック事、人形のチャチャゼ

口のいつもの朝の挨拶に何時もの調子で返す

最初の頃は真に受けてしまつて怖かつたが（本人？はいたつて本気なのだろうが）今は朝の日課としてないと物足りない感じだ

「お早うございます、瑠華」

「おはよう茶々丸、オネーは？」

この子は絡繰茶々丸、私より背が高く胸もあるがこう見えて我が家の末っ子だ、羨ましい

「マスターはまだ寝ていらっしやいます」

「またか…起こしてくる」

そして今日は平日であり、中学生である私たちは登校日だ、寝坊なんてしては居られない

コンコン

反応がない

コンコン「入るよー」

どうせこのまま粘つても起きない事は承知の上なのですぐに寝坊助の部屋へと入るそこにはカーテンを閉め切り、布団に頭までくるまる我が家のがいた

「起きろー、あーサーだーぞー」

「んー、うるさい」

「まったく、仕方ない」

今まで何度も起こうしても起きず、色々な方法を試したがことごとく失敗  
そして物は試しと冗談で言つた一言がこの眠り姫を目覚めさせるキーワードとなつ  
てしまつた

「ゴニヨゴニヨゴニヨ」

「グワバツ!! 「起きたぞ!!」

「おはようエヴァねえ」

我が家の主であり眠り姫事、エヴァンジエリン・A・K・マクダウエル

何を隠そこの人こそあの日、私を家族へ迎え入れてくれたその人である・・・見た  
目少女だが

「何か言つたか?」

「んーん、何にも」

お父さんたちのお葬式の日、女性の家に着いた途端彼女の背が低くなり若返つた  
何を言つているか分からないつて?大丈夫だ私も分からなかつたから

その後、エヴァンジエリンが人間では無く吸血鬼という種族という事、この世界には  
魔法が存在しており私の両親も魔法使いであり、その関係者だつた事

そして、飛行機事故では無く魔法世界という場所で消息を絶つた事を・・・  
だがしかし、その時私が彼女へと言った言葉は「エヴァ母さんじやなくて、エヴァ姉  
さんだつたのか」という、ずれた事だった

その時の姉さんも「驚く所はそこか?」と若干あきれ顔だつたのは今でも覚えている  
「さあ、起きたぞ約束だ」

「分かつてるよ、帰つてきたらね」

「ああ、分かつてing」

そう言つて姉さんは意気揚々と一階へと下りて行く

約束とは何かつて?それはまた次回に、まあ吸血鬼といえば・・・がヒントかな

「よし、それじゃ皆行こうか」

「ああ」「はい」「ケケケ、行ツテコーィ」

お父さん、お母さん、家族4人元気によっています!

## 2時間目

麻帆良学園中等部 2年A組 出席番号6番

詩之宮・F・瑠華

9月30日生まれ てんびん座 14歳

ジエリンと家族となる（姓名の変更は無い）  
2年前 小学校6年の時に両親と死別し、昔、両親と親交が有つたと言うエヴァン

ジエリンからこの世界には魔法が存在し、この麻帆良の地には魔法使いが多数存在している事を明かされる。なお、エヴァンジエリンが吸血鬼の真相（ハイ・デイル・ライトウォーカー）であり「闇の福音（ダークエヴァンジエル）」という二つ名で呼ばれ恐れられている事を知る

ちなみに、瑠華自信は魔法が使えない（実践済み）、その代り詩魔法という別のタイプの魔法が使える。エヴァンジエリンによると、瑠華と瑠華の母親は『レーヴァテイル』といふ世界に少数しか存在しない種族だという、それを聞いた瑠華は「私つて絶滅危惧種だつたのか」と、どこかずれた発言をしたとか

「これが私のプロフィールです」

「どうした、瑠華？」

「ん？ 何でも無いよ」

「そうか、ほら、さつさと教室へ行くぞ」

「あ、待つてよエヴァねー、それに行つても姉さんは寝てるかさぼるぐらいしかしないでしょ」

「ふん」

エヴァねーは吸血鬼という特性から、日中には極端に弱い、そのため授業中は大概寝ているか、さぼつて屋上で寝ているかのどちらかになる（稀に起きて授業を受けているが）

それと15年ほど前に、ある魔法使いにちよつかいをかけた所「登校地獄」の呪いをかけられてしまい、以来15年ほど中学生を繰り返している（今回で5回目？）

しかもその呪いはタチの悪い事に滅茶苦茶なかけられ方をしており、吸血鬼の利となる性質を封印されているため、花粉症持ちに風邪をひくなど代謝面の低下、魔力の大幅抑制が付属していた、そのため1年に何度も姉さんを看病したか

そんなエヴァねーだが、私にとつては大切な家族であり頼れる姉である事は間違いない（確信）

「さつきから考え方をしているようだが悩みごとか？」

「んーん、エヴァねーは頼りになるお姉ちゃんなんだなーって」

「・・・な、何を分かり切つた事を」

「マスター、顔が赤くなつてますよ」

「う、うるさい！そんな事を言うのはこの口かー！」

そういつてエヴァねーは茶々丸のほっぺたを詰まんでむにーっと引っ張る  
絡繹茶々丸、私たち家族の末っ子にしてロボット娘だ

彼女はハカセこと葉加瀬聰美（はかせ さとみ）と超鈴音（チャオ リンシェン）、二  
人の天才によつて生み出された魔法と科学の融合ロボット。そのためプログラムによ  
らない、自我を持つた行動をする事が有るガイノイドだ。

上の説明から分かる通り、ハカセとチャオの二人も魔法関係者であり、同じクラスメ  
イトでもある

「マ、ミヤフターあわりひつはららいれくらさい」

「全く、最近生意気になつてきてないか？」

「あはは、良いんじやない？ その方が楽しくて」

彼女は私が中学へ進学するのと同じ時期に起動し家に来たため、私よりも背が高く「胸」が大きくて1歳なのだ、「胸」が大きくても：

「どうしました瑠華？」

「・・・何でも無い」

「？」

「くつくつく」

茶々丸には気付かれなかつたが、エヴァねーには私の視線が何処に行つていたかお見通しのようだ

「はあ」

私がため息をついていると後ろから、車顔負けの速度で走つてくる「人間」と一緒にローラースケートを履いた女の子がやつてきた

「あ、おはよー瑠華！」

「おはよーや瑠華！」

「おはよー、明日奈に木乃香、今日も元気だねー」

「それだけが取り柄だからね」

「もー、アスナつたら、それだけじやないやろ」

この二人は、元気な方が神楽坂明日奈で、反対におつとりした方が近衛木乃香である。

二人ともクラスメイトだ

「エヴァンジエリンに茶々丸さんもお早う」

「ああ」

「お早うございます、明日奈さん木乃香さん」

「アスナ、そろそろ」

「あ、そうね、それじゃ私たち行くとあるから先に行くわね」

「はい、また後で」

「ほなな！」

そう言つて二人は学園へと向かつて行つた

「んー」

「どうしました、瑠華？」

「いやね、木乃香はまだ分かるんだローラースケートだから、でも明日奈のあの身体能力の高さはやっぱ普通じゃないなーと」

「まあ、ここは麻帆良だからな、何が有つても不思議では無いだろう」

私の疑問にエヴァアねーが答えた

「やー、その不思議筆頭の姉さんが言うと、説得力ありますな」

「この！貴様も同じだろうが！」

「うわわ、危ないって」

「ふん、今日はこのまま連れて行け」

姉さんをからかうと、私の背中に飛び乗り公開処刑を言い渡されてしまった

「まあ良いけど、エヴァねーは恥ずかしくないの？」

「このまま寝るから関係ない」

「うわー…」

「変わりましょか瑠華？」

「ありがと茶々丸、でも大丈夫」

そうして私は大衆の視線の中、エヴァねーを背負つたまま中等部校舎へと向かうの  
だつた

「やあ、皆おはよう」

『お早うございまーす！』

2—Aのホームルームの時間、担任の「タカミチ・T・高畑」が教室へとやってきた  
「あー瑠華くん、エヴァンジエリンは？」

「すいません」

「あーいや、君のせいじや無いからね、そんなに気にしないで」

私が申し訳なさそうに謝ると、高畠先生も申し訳なさそうに謝つてきた  
エヴァねーは校舎に着くと私から下り、そのまま教室へと向かわすどこかへと歩いて  
行つてしまつた、何時もの事なのでどうせ屋上できぼつてているのだろう、茶々丸は今回  
はエヴァねーに付き添つてゐるようだ

そんな何時もの日常が過ぎて行き、帰りのホームルーム

「さて、今年度も2月に入つて残りわずかになつた、3月になれば期末テストがあるから  
ね、皆そろそろ気をつけて行こう」

『・・・はい』

「ははは」

期末テスト、学生にとつては余り好きになれない言葉だろう、特に2—Aというクラ  
スは格別だ

中学に入つてからテストと言うもので、学年別順位で上位を取つたことなどほとんど  
無い、クラスには超鈴音や近衛木乃香を始めとする数人の天才が個人でトップクラスに

入つてはいるが、それを相殺または塗りつぶすほどの赤点を取る人物が5人いる（誰とは言わないが）

そのためか、ここ2—Aではテストと言う単語を聞くだけでテンションがガタ落ちしてしまうのだつた

放課後

「おまたせ」

「ああ」

すでに外で待つていた姉さんと茶々丸に合流し帰路に着く

中等部になると皆寮生活になるが、私と姉さん、茶々丸は自宅からの通学だ、理由は色々とあるが一つとしては学園の先生（魔法関係者）達が、姉さんを一般の生徒と一緒に場所に居させたくは無いのだろう

「瑠華、あれの製作はどうだ？」

「あれ？、ああ、あれね。うん、大体は出来あがってきたよ、春休み中には完成かな」

「そうか、初めて名前を聞いた時はもしやとも思ったが、この短期間で完成させるとはな。もう一つの方も上手くなつて欲しいものだが」

「あはは、精進します」

私のミドルネームのフイラメント、意味は色々とあるが姉さんが注目したのは、ラテン語で「糸」を意味する *filum* に由来する所だ

姉さんの二つ名の中に「人形遣い（ドールマスター）」と言うものがある、その昔姉さんが吸血鬼になりたての頃、人間や魔法使いたちから身を守るために編み出した防衛術の一つで、全盛期の姉さんならば一度に最大周囲 3 km の範囲で三百体の人形を操ることができるらしい、今は呪いによりチャチャゼロに意識が残る程度に落ちてしまつたがそして私はドールマスターとしてのスキルを1から徹底的に叩きこまれた。糸を使い者を操る事を覚え、次にフイラメント（*filament*）を操り生物を意のままに動かす事だが、実験として姉さんを操つてみたら成功、調子にのつて姉さんに恥ずかしいポーズを決めさせたら、力づくで糸から逃れられ、逆に私がさらに恥ずかしい事になつたのは言うまでもない

操り方を覚えた私に姉さんは、次は自分の人形を自分で作れと行き成り難題を押し付けてきたのが1年ほど前、家の中には人形を作つたりする事ができる部屋が備えられており、分からぬ所は姉さんに教えてもらいながら現在鋭意製作中である。

そしてもう一つと言うのは

「踏み込みが甘い！」

「ふぎや！」

「ほらさつさと立て、休んでいる暇は無いぞ！」

「つくづく」

地面に叩きつけられ苦悶の声を上げる私に容赦の無い言葉を投げつける我が姉  
なんでもエヴァねーと一緒に住むからには少しでも自衛手段を身につけておけとの  
ことで、最初の頃は攻撃の仕方や避け方を軽く教えてもらつていただけのはずだったの  
だが

「隙あり！」

「有るわけ無いだろ」

「あうん」

いつからか組み手になり、本格的な戦闘にまでなつていった（魔法は使っていない）  
ちなみに本気でやつているのは私だけで、エヴァねーの方はこれでも力の5%も出さ  
ないと言われた時は挫折しそうになつたが、この鬼姉はそれを許してくれるほど甘つ  
ちよろくは無い訳で

「う、ううう・・・」

「ふう、今日はこんなものか」

「ケケケ、ボロ雑巾ニナツテラア」

「大丈夫ですか、瑠華？」

「ありがとう、茶々丸！」

「ふん、話せる余力があるなら回復しておけ」

「・・・はい」

体を起こし目を閉じ集中する

（お願い金丹）♪♪♪

私が謳い始めると何処からともなく笛を持った女の子が現れ音色を奏でる、すると私の肉体的疲労感が抜けて行き擦り傷も直り始めた

これがレーヴァテイル特有の魔法「詩魔法」、詩魔法は自らの想念を具現化させて攻撃や防御に用いることができる魔法らしい  
この詩魔法、誰かに教わると言う事はできず自分で紡いでいく他、数を増やす事はできないらしい

らしいというのも、エヴァアねー自信も私のお母さんから少し聞いただけらしくすべてを知っている訳では無いみたいだ

「何時見ても不思議なものだな」

「はい、私の方でも解析はしていますが、エネルギーは感知できるのに実態が無い、まるで幽霊のような物としか」

「ふう・・・」

精神的疲労感は少しあるが何時もの事なのであまり気にしない

「マスター、瑠華、食事の用意が出来ています」

「ん、そうか」

「お腹すいたー」

エヴァアネーの特訓が終わり、茶々丸の用意してくれた夕飯を食べに家に戻る  
最初こそレシピ通りの食事で普通の美味しさではあつたが、最近は皆の好みに合わせて作れるようになつてきたのでさらに美味しくなつた、美味しくなつたのは良いんだが食べすぎには注意せねば、一部に栄養が行けばいいのだがそんな様子が見られる訳が無く・・・

「そうだ、瑠華」

「ん?」

「朝の約束忘れたとは言わせんぞ」

「う・・はい」

「約束?」

「ケケケ、イツモノ事ダヨ、イモウトヨ」  
「はあ」

夕食が終わり就寝前

「あまり強くしないでよ」

「わかってる、ほら早く出せ」

「ん」

「ふふ、でわやるぞ」

「ん…ふあああ

「ん…つく、ん」

朝の約束、それは吸血行為

姉さんはこの吸血行為によつて、他の生物から魔力を吸收しているようだ、そのおかげかチヤチヤゼロも少しの間なら自分で体を動かせるほどに回復したようだ

朝の弱い姉さんに冗談半分で言つたら起きてくれたのがきっかけで、最近ではこの言

葉を言つてくれるまで起きないと言つた気迫すら感じるほどだ、別に吸血されるのが嫌な訳じやない、只少し気持ちが良くなつてしまつのが問題なのだ

「ん…っぷは」

「ふう、終わつた?」

「ああ、美味かつたぞ」ペロ

「ふああああ!!」

終わつたのかを聞いたら姉さんに吸血場所である左の首筋を舐められ、恥ずかしい声を出してしまつた

「うー」

「ククク、すまんすまんついな」

以前別の場所で吸血は出来ないのかと聞いた事が有るが、出来る事には出来るが首での吸血が姉さんのポリシーらしい

「それじや、明日はちゃんと自分で起きてね」

「善処しよう」

「・・・はあ、お休みエヴァねー」

「ああ、お休み瑠華」

エヴァねーと挨拶をし、少し貧血氣味な体で部屋へ戻りベッドへと潜り込む

それでは皆さん、お休みなさい